

当院におけるCAPD

小林和夫¹⁾・亀山宏平¹⁾

はじめに

CAPDは1976年にPopovichらにより考案され、我国では1980年から行なわれるようになった。1982年には全世界では10,000人を超えており、我国でも261人を数えている。

当院では1982年からCAPDを施行しており、1984年5月1日には自己腹膜灌流指導管理が認められ、同年9月初旬まで9名にCAPDを実施した。それら9名について検討したので報告する。

症例提示

症例は表1に示すように、通院困難例が4例、血液透析困難な例が4例、およびCAPDを希望した1例であった。通院困難例は、いずれも住居が遠方であり、特に冬期間に当院まで通院するのが難しい例である。このうち症例1は住居が上越方面であり、血液透析のために時間通りに通院することは全く不可能であった。このため当院で初めてのCAPDを導入することになったが、経過中に胃潰瘍、尿路感染症、さらに腹膜炎を併発し、かつ医療側の不慣れもあってCAPDに対して拒否反応を示すようになり、またこの頃上越地方で新たに透析施設もできたので、CAPDを断念し血液透析に移行した。症例5、6および7は住居が柏崎市方面で遠く、かつそれぞれが仕事を持っていたので週3回の通院透析は難しくCAPDを始めた。このうち症例5と6は現在も仕事をしながら元気にCAPDを継続しており、月に2~3回の検査などのための通院をしている。しかし症例7は視力障害や脳動脈硬化症による手指の振せんなど不利な条件があり、度重なる腹膜炎の併発から、ついにCAPDをあきらめて血液透析

とした。

一方、症例2、3、4および9はいずれも血液透析困難例であり、このうち症例2と4は糖尿病性腎症の末期で、かつ脳動脈硬化症による衰弱が強く、血液透析が困難なためIPDを施行していた。しかし排液不良などがあって複雑なため、CAPDに移行したが、いずれも死亡した。また症例3は多のう胞腎で、症例9は左腎は腎癌のため摘出され、右腎は腎硬化症と思われる例であるが、いずれも夜間せん忘がひどく、血液透析は危険なためCAPDを施行した。このうち症例3は死亡したが、症例9は全身状態の改善が著明でせん忘状態は消失し、自分でCAPDを管理している。症例8は専門学校に通学中であるが、入院時に重症高血圧症のために透析を必要とすることを説明し、また透析には血液透析とCAPDがあることも説明して選択してもらい、その結果CAPDを始めたわけであるが、非常に順調に社会復帰している。この例も、学業のための血液透析困難例としてもよいかもしれない。

考 按

以上が当院におけるCAPD例であるが、これまでのところCAPDの使用に関して2通りの方向があった。1つは通院困難例であり、他は血液透析困難例である。さらに血液透析困難例も2つに分けられ、一方は社会復帰が望めそうもないが、透析せざるを得ない例であり、他方は腎不全の全例にあてはまるかもしれないが、透析施設への拘束を少なくし、有利な条件で社会復帰をめざす例である。これはCAPD本来の目的でもあるが、いろいろと難問もあり、今後に期待したい。

結 語

59年9月現在、当院におけるCAPDは4例で

¹⁾長岡中央総合病院内科

表1 当院におけるCAPD症例(57年~59年9月)

例数	症 例	年令	性	基礎疾患	職 業	CAPD導入の理由	透折日・方法	予 後
1	猪 ○ 三 ○	52	♀	慢性糸球体腎炎	主婦	通院困難	57年3月9日 IPD 3月12日~5月17日 CAPD	H D
2	山 ○ 実	66	♀	糖尿病性腎症	無 職	HD困難	57年4月1日 IPD 7月20日~9月24日 CAPD	死 亡
3	杉 ○ キ ○	78	♀	多のう胞腎	無 職	HD困難	57年8月19日 IPD 58年2月2日~2月9日 CAPD	死 亡
4	樋 ○ 壮 ○	70	♂	糖尿病性腎症	無 職	HD困難	58年3月18日 IPD 4月13日~4月21日 CAPD	死 亡
5	西 ○ ミ ○	62	♀	糖尿病性腎症	家政婦	通院困難	58年1月19日 IPD 6月1日~ CAPD	家庭透折
6	西 ○ 美○子	35	♀	慢性糸球体腎炎	美容師	通院困難	58年8月12日 IPD 9月14日~ CAPD	家庭透折
7	蓮 ○ 博 ○	63	♂	慢性糸球体腎炎	農 業	通院困難	58年9月23日 IPD 59年11月22日~4月26日CAPD	H D
8	杉 ○ 浩 ○	19	♂	慢性糸球体腎炎	学 生	希 望	59年1月27日 HD 1月30日~ CAPD	家庭透折
9	高 ○ 邦 ○	61	♂	腎 硬 化 症	無 職	HD困難	59年7月4日~ CAPD	入院透折

あり、家庭透折をして社会復帰している例が3例で、現在は院内透折中だが家庭透折の準備中の例が1例である。いずれも血液透折例に比し、検査

上も良好であり、今後とも自己管理の可能な例があればCAPDを導入していくつもりである。